

都市生活者意識調査2013より

第二回

▼アベノミクスについて

- ①アベノミクスの認知
- ②アベノミクスに期待すること・起りそうなこと
- ③アベノミクスによる景気の動向
- ④アベノミクスの評価

マーケット・プレイス・オフィス代表

立澤芳男(たつざわよしお)

- 流通系企業の出店リサーチ・店舗コンセプトの企画立案／都市・消費・世代に関するマーケティング情報収集と分析
- 現ハイライフ研究所主任研究員・クレディセゾンアドバイザースタッフ
- 元「アクロス」編集長(パルコ)／著書「百万人の時代」(高木書房)ほか

第二回 都市生活者は『アベノミクス』をこう考える

ハイライフ研究所「都市生活者意識調査2013」の結果から

ほぼ1年前、「大胆な金融緩和」を掲げ安倍晋三総裁が衆院選で圧勝し、「アベノミクス」を打ち出した。その「第1の矢」、日銀の量的緩和を受けてマーケットでは一時の波乱はあっても円安・株高基調が続き、物価も上がり始めた。

アベノミクスのシナリオは、中央銀行は金融機関から国債などの金融資産を買い上げる。金融機関はそのカネで株式を買えば、株価が上がる。銀行から融資を受ける消費者は住宅や車を買う。企業は株式市場から資金調達しやすくなり、設備投資を増やす。需要がこうして増える。他方、発行量が多い通貨の値打ちは、量の少ない通貨よりも落ちるので、通貨安となる。すると輸出が有利になる。通貨レートが安くなれば、物価が上がるが、「デフレはこうして止まるし、景気もよくなる」というシナリオだ。しかし、問題はその通りコトが運ぶのかどうかだ。長期デフレに倦(う)み切った家計や企業は円安・株高だけでは動じなくなっている。

日銀の政策委員会の大勢は来年の消費者物価上昇率を消費税率引き上げの影響分を含め3%前後とみているが、銀行の1年定期預金の利率はたった0.025%。物価上昇分を勘案すると家計資産はかなり目減りする。また、円安効果の波及も遅い。勤労者は3%前後以上賃上げがないとフトコロ具合は悪くなる計算だ。

企業雇用の3分の2を担う中小企業の多くは今でも円安に伴う仕入れ原材料コストの上昇を販売価格に転嫁できない。大企業は別としても、賃上げも消費増税分の価格転嫁も容易ではない。

ちまたの高揚感とは東京・銀座の欧州製高級車店をブランド物で着飾ったセレブでにぎわせてるだけのようだが、都市生活者のアベノミクスに対する実感はどのようなものなのか？

データファイル第二回では、「アベノミクス」に対する都市生活者意識を、地域別(東京、大阪)、男女別・年齢別、年収別に分析し、その結果をレポートした。(次回(1月発行)は『消費増税』について調査結果を報告)

第二回レポート 都市生活者は『アベノミクス』をこう考える

I - アベノミクスの現況整理

円安・株高で政府・財界・企業から高評価を受けるアベノミクス

1. 株、41年ぶり大相場か(2013年の年間上昇率)、円は第2次石油危機以来の下落率に

株式市場で日経平均株価が、12月2日前引け時点で1万5642円と前年末を5247円上回った。この水準を年末まで維持すれば、年間の上昇率は50.5%と、バブル経済期の1980年代後半を超え、1972年以来41年ぶりの大相場となる。戦後に東京証券取引所が再開した49年5月以降で5番目の上昇記録だ。

一方、外国為替市場で円相場はドルに対して2日12時時点で1ドル=102円35~38銭近辺と、東京市場の前年末(12月28日17時時点)と比べ16円04銭の円安・ドル高だ。この高水準で推移し年末を迎えると、円の年間下落率は15.7%に達し、第2次オイルショックで貿易赤字が膨らんだ1979年(18.7%)以来の大きさとなる。

73年2月に変動相場制に移行した後で、その79年に次ぐ2番目の下落。年末に106円14銭より安くなれば、変動相場移行後年間下落率の最大を更新する。

(注)2013年は円が2日12時時点、日経平均が2日前引け時点で比較。円は日銀の公表値に基づき算出。

(1)	1952年	118.4%
(2)	1972年	91.9%
(3)	1951年	62.9%
(4)	1960年	55.1%
(5)	2013年	50.5%
(6)	1986年	42.6%
(7)	1958年	40.5%
(8)	2005年	40.2%
(9)	1988年	39.9%
(10)	1969年	37.6%

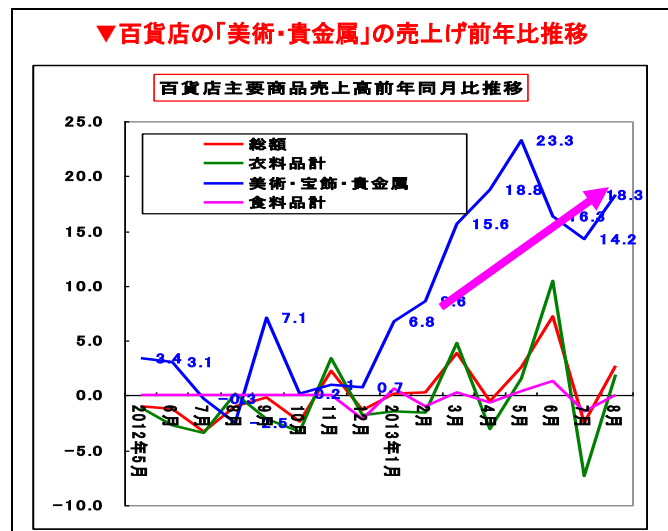
(1)	1979年	18.7%
(2)	2013年	15.7%
(3)	2001年	12.6%
(4)	1989年	12.2%
(5)	2005年	11.7%
(6)	1996年	11.3%
(7)	2000年	11.2%
(8)	1997年	10.7%
(9)	2012年	10.1%
(10)	1984年	7.8%

2. 飛ぶように売れるポルシェ、百貨店の高額商品 アベノミクス効果は本物？

景気回復は本物なのか。1千万円を超える超高級外車から高級時計など宝飾品、振り袖着物、ビジネスクラスで行く海外周遊ツアー……。さまざまなジャンルで高額商品が飛ぶように売れているという。

「アベノミクス」の効果もあり、日経平均株価が持ち直す中、長らく続いた不況で堅く閉じられた消費者の財布のひもが緩まりつつあるようだ。景気に左右されやすいとされる百貨店の業績も好調。他業界よりもデフレ脱却の動きが早く出ているのが輸入車販売だ。伊フェラーリや英ロールス・ロイスなど各社の売り上げは軒並み好調だという。旅行者に人気があるのが10~15日間の南米周遊ツアー。ペルーの世界遺産「マチュピチュ」や、ブラジルとアルゼンチンにまたがる世界最大の滝「イグアスの滝」など人気スポットを日数をかけて巡るツアーで、50万~100万円の価格帯が中心

▼百貨店の「美術・貴金属」の売上げ前年比推移



だが、前年同時期に比べて2～3割増えた。旅行者の中心は50～70代という。

日本百貨店協会によると、8月までの主要10都市の百貨店売上高は、7月を除いてすべて前年を上回った。全国での業績をみても、東日本大震災からの反動などで16年ぶりに前年実績を上回った平成24年をしのぐ勢いをみせている。勢いを牽引(けんいん)するのが宝飾品や美術品などの高額商品。今年8月の商品別の売り上げで「美術・宝飾・貴金属」は前年同期比 18.3%増で全項目の中で飛び抜けて高い増加率をみせた。前年同期を上回るのも12カ月連続だったという。東京スカイツリーや東京ディズニーランド 30周年が需要を牽引。東京のホテルの稼働率も軒並み好調である。

3. 経済対策 5.5 兆円 増税直後の景気下支え、7～9月回復焦点

景気回復が着実に進行しているようだが、問題は来年4月からの消費増税の前後の景気がどうなるかが懸念されているのも事実だ。そこで政府は12月5日の臨時閣議で5.5兆円の経済対策を正式に決めた。来年4月の消費増税の影響を和らげる狙いで、家計への現金給付や公共事業など効き目の出やすい施策を盛り込んだ。

ただ、給付金をもらえるのは6月以降になる。足元では公共事業の執行の遅れも目立つ。来年4～6月期の景気落ち込みを下支えする効果は限定的で、7～9月期のプラス成長への復帰を下支えできるかが焦点になりそうだ。

アベノミクスが高評価される中、良きにつけ悪しきにつけ消費増税の問題が出てくるのは今年年末から来年の春になる。



4. アベノミクスと家計の関係のバランスがどうなるのか？見つめる都市生活者たち

アベノミクスが家計にどう影響するかシンプルに考えると、インフレ(物価上昇)や消費税の増税が家計に与えるダメージは意外と大きいと思われる。

仮に増税等でモノの値段が上がっても、家計の収入(年金や給料)が増えて今と同じ生活を続けることができれば大きな問題はない。しかし、多くの方は自分の収入が増えるかどうか自分で決めることはできない。年金生活者が受け取る公的年金の金額は国が決めるし、働いている人のうち自営者は別だが、自分で自分の給料アップを決められる人は殆どいない。

Ⅱ-「アベノミクスについて」都市生活者意識調査結果レポート

アベノミクスとは、昨年 2012 年 12 月 26 日より始まった第 2 次安倍内閣において、安倍首相が表明した”3本の矢”を柱とする経済政策のことで、政策の最大目標を経済回復と位置づけ、デフレ脱却を達成するというものだ。確かに、昨年末と較べると円安・株高が一段と進み、今年の夏季や年末賞与の伸びはリーマンショック以降最高となっている。消費者心理も好景気とまでは言えないが、これからは悪くはないという期待感が蔓延している。本調査は 9 月に実施したが、9 月以降の政府発表の景気関連指標データを見る限り、景気の下降・停滞を示すデータは数少なくなっている。

景気は悪くないというもの、来年 4 月から消費増税が実施されるという。果たして、9 月時点ではあったが、消費増税がアベノミクスと両立するのかという疑問を持ちながら、都市生活者の「アベノミクス」に対する受け止め方など意識はどのように変わっていったのかを聞いてみた。

■調査実施;2013年9月27日(金)~10月15日(火)実施、

■調査サンプル;N=1800[東京=1125+大阪=675]

▼調査サンプル数 計 1800 名				世帯年収	1800	100%
東京地区	1125	大阪地区	675	世帯年収:200万円未満	109	6.1
				200万円~300万円台	300	16.7
男性	904	女性	896	400万円~500万円台	413	22.9
13~19歳	71	13~19歳	68	600万円~700万円台	267	14.8
20代	137	20代	133	800万円~900万円台	192	10.7
30代	186	30代	180	1000万円~1100万円台	102	5.7
40代	170	40代	160	1200万円~1500万円台	36	2.0
50代	132	50代	130	1600万円~2000万円台	7	0.4
60代	152	60代	162	2100万円以上	4	0.2
70~74歳	56	70~74歳	63	わからない	370	20.6

■調査項目

▼アベノミクスについて
①アベノミクスの認知
②アベノミクスに期待すること・起りそうなこと
③アベノミクスによる景気の動向
④アベノミクスの評価

「アベノミクス」について 生活者意識調査結果

①「アベノミクス」の認知は？

i) ある程度知っているが、中身がよくわからないアベノミクス！

アベノミクスについての認知度を聞いてみた。トータル全体では、「知らない」がわずか3%であるが、「よく知っている」も7.4%ということで、都市生活者にとっては身近なこととしてはとらえられていないようだ。

確かにアベノミクスという内容自体は曖昧であるには違いないが、何か景気を良くする政治をしてくれるのだろうというイメージ程度しかもっていないことが分かる。

認知度	割合
良く知っている	7.4
ある程度知っている	49.2
言葉をきいたことがある程度	40.4
知らない	3.0

ii) 女性は「言葉をきいたことがある程度」が半数を超える

地域別・男女別にアベノミクス認知度を見ると、東京の都市生活者の方が大阪の都市生活者より関心が強く、

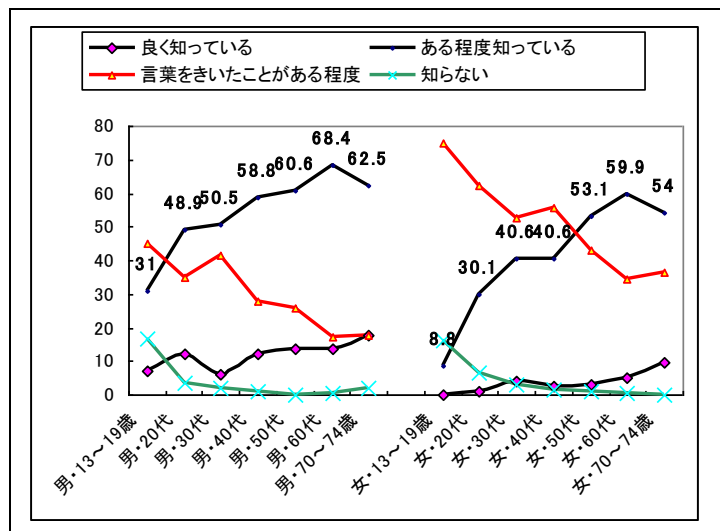
また女性より男性の方が関心が強いようで、「よく知っている」は男性で11.4%だが女性は3.3%と低い。女性は「言葉をきいたことがある程度」が50.6%と半数を超える。ビジネスマンはアベノミクスについては仕

	調査数	良く知っている	ある程度知っている	言葉をきいたことがある程度	知らない
TOTAL	1800	7.4	49.2	40.4	3.0
東京	1125	8.0	50.7	38.3	3.0
大阪	675	6.4	46.8	43.9	3.0
男性	904	11.4	55.5	30.3	2.8
女性	896	3.3	42.9	50.6	3.2

事上必要なことであり当然の結果となっている。アベノミクスは「よく知っている」「ある程度知っている」でのスコアが高くなっている。女性は、アベノミクスより消費増税に関心を寄せているのではないと思われる。

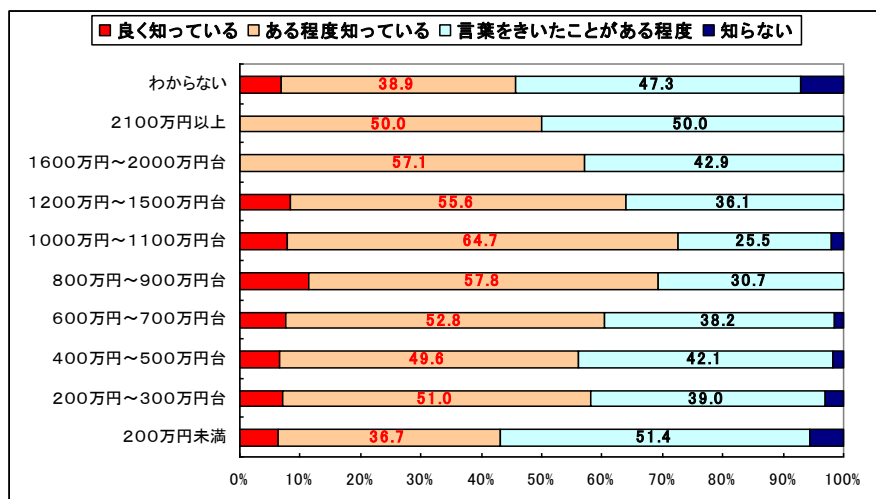
iii) 若い世代は「聞いたことがある程度」、中高年は「ある程度知っている」が大半を占める

年齢別男女で見ると、「よく知っている」「知らない」に回答した人は年齢の違いはさほど大きな差異が見られないが、10、20代は「聞いたことがある程度」が多くを占める。「ある程度知っている」は、年齢が上がってゆくに従って増え始め、中高年世代や高齢世代では50%を超える。



iv) 年収別で見ると、年収1千万円前後の収入層がアベノミクスに強い反応

アベノミクスの認知の程度を年収別で見ると、「年収がわからない」世帯については何とも言えないが、「ある程度知っている」が最も多い世帯は年収1千万円台の世帯である。概ね年収800万円から1千万円の収入層は、アベノミクスについては注意深く見ていることがわかる。年収が低くなるほど「知らない」「言葉を聞いたことがある」と回答する人が増えている。年収1千万円以上の世帯は、よく知っていると言い切る人は少ない。



②「アベノミクス」に期待すること・起りそうなことは？

1) 殆どどの人が、とにかく『景気回復』を望む！

回答者トータルで見ると、経済政策としてのアベノミクスに関しては、一般の会社員も主婦・高齢者などにとっても、曖昧模糊としたものに違いない。しかし、大いに期待する意識は強い。

最も期待していることは、「景気回復」で 62.6%という高スコアとなっている。第二位は「所得の向上」(40.7%)、第3位は「経済成長」(37.3%)となっている。

順位	期待すること	スコア (%)
1位	景気回復	62.6
2位	所得の向上	40.7
3位	経済成長	37.3
4位	デフレからの脱却	25.4
5位	雇用環境の改善	23.6
6位	特にない・わからない	21.1

約20年間の不況の下で生活してきた人達にはそれぞれ個人個人の思いがあると思われるが、景気拡大や経済成長までは期待していない。

とにかくはやく『景気回復』して欲しいという思いは強い。一方、『特にない』(6位)が 21.1%もいることにも注目しておきたい。

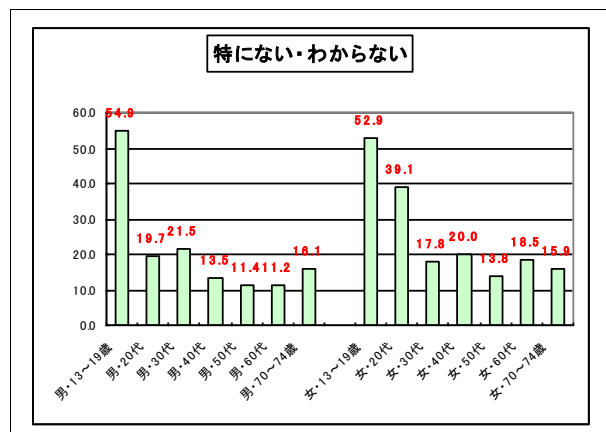
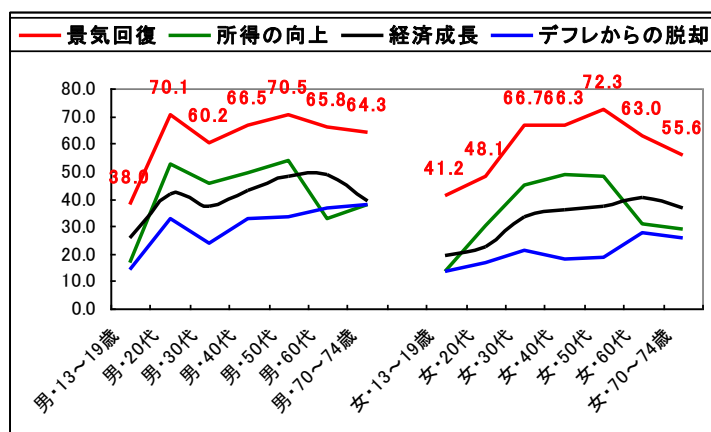
地域別・男女別	東京	大阪	男性	女性
①景気回復	64.4	59.4	63.8	61.3
②所得の向上	41.8	39.0	43.7	37.7
③経済成長	40.0	32.9	41.6	33.0
④デフレからの脱却	27.7	21.6	30.4	20.4
⑤雇用環境の改善	24.4	22.2	23.2	24.0

ii) アベノミクスに期待大の東京地区と男性陣

地域別、男女別でアベノミクスに「期待することベスト5」(トータル)を見ると、各項目において、「東京」が「大阪」を上回っている。「男性」と「女性」を比較すると、「雇用環境の改善」において女性が上回るが、それ以外は男性のスコアが高い。

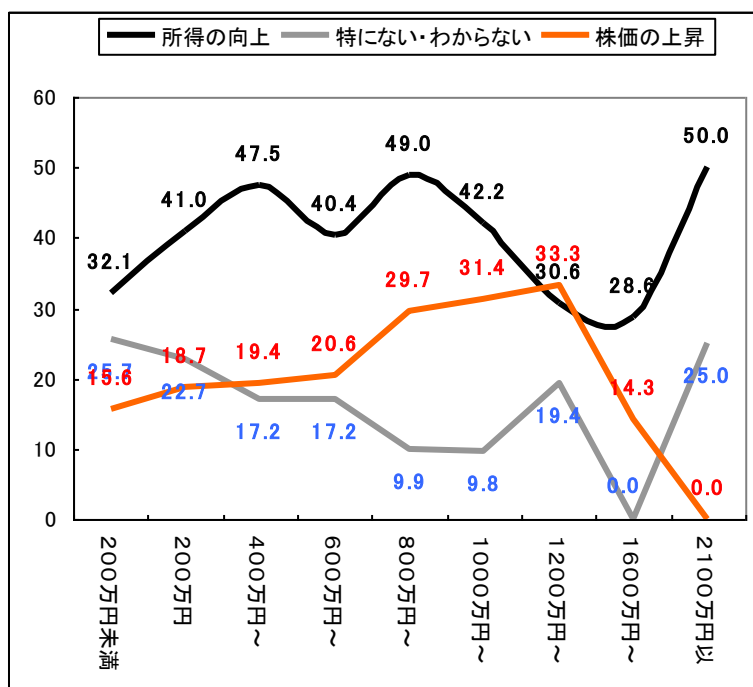
iii) 年齢・男女別でのアベノミクスの期待は景気回復が最も高い。

アベノミクスへの期待は「景気回復」が年齢別・男女別においてもトップを占めるが、男女ともに現役世代の期待度は若年層や高齢者を大きく上回っている。景気回復→経済成長→所得の向上というシナリオを生活者も描いていることは確かだ。今冬のボーナス支給や来春の賃上げなどに夢を膨らませている。一方、「期待していない」は、仕事をしていない人(10代中心)や20,30歳代の男女の2割くらいの人であり、経済政策などお国のやることが直接的に自分達にかかわってこないのではという思いが強いようだ。



iv) 年収別では、高収入層は「株価上昇」への期待が大

年収別にアベノミクスへの期待を見ると「景気回復」はどの年収層でもトップではあるが、具体的な内容として期待することが異なっているのが明快だ。例えば「所得の上昇」は年収 3 百万円~8百万円の年収層の期待が大きく、「株価の上昇」は、年収 1 千 6 百万円以上は別にして、年収が高まるに連れ増えている。年収が高くて余裕のあるプチ富裕層は、定期外収入の増加に期待を寄せているようだ。



③「アベノミクス」による景気の動向は？

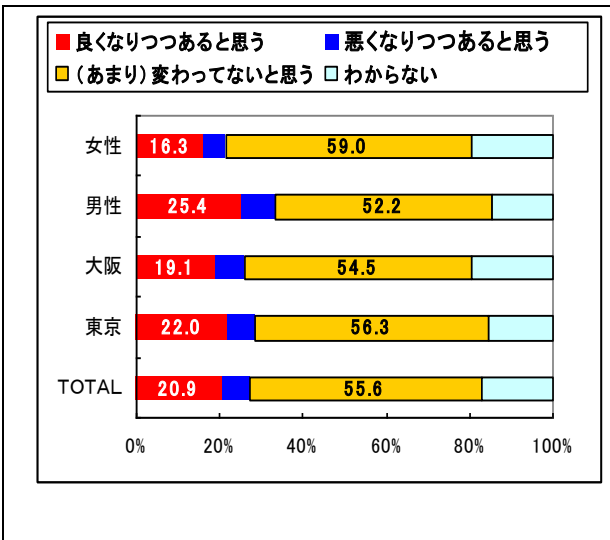
i) 景気が「良くなりつつある」が、「悪くなりつつある」を大きく上回った

この調査実施が9月末という時点であり、その時点における都市生活者の「景気観」であることに留意していただきたいが、アベノミクスによる景気動向については、『(あまり)変わってないと思う』(55.6%)が半数を占めており、全体的には都市生活者の本音が出てきているようにも思える。しかし、アベノミクスが騒がれ始めたのが今年の春頃からで、調査実施の9月頃は株高・円安基調になってきたせいだろうか、『良くなりつつあると思う』人が20.9%となっており、『悪くなりつつある』(6.5%)を大きく上回った。ここでも、東京地区と男性でのスコアが、大阪地区や女性を上回っている。

③「アベノミクス」による景気の動向調査数 1800

良くなりつつあると思う	20.9
悪くなりつつあると思う	6.5
(あまり)変わってないと思う	55.6
わからない	17.0

消費者としては、アベノミクスや消費増税の話題がマスコミで大きく取り上げられ、無関心ではいられないという心理状況にあったようだ。当時は、安倍政権の支持率が一定の割合で高位に位置しており、生活心理の好転化と平衡しているようにも見える。

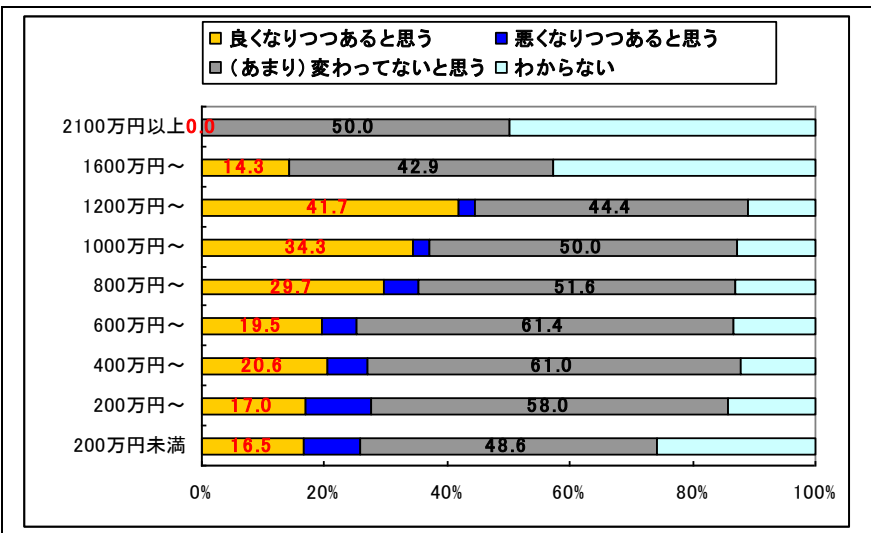


ii) 年収別で大きく異なる景気の見方。

高収入層は『景気は良くなりつつある』

景気の良し悪しについて『変わっていない』『わからない』と答えた人は年収の高低に関わりなくほぼ50%以上いるが、景気が『良くなりつつあると思う』という点(認識)においては、年収の高低差で大きな認識差が明快に見える。

その分岐点は、1600万円超は除いて、年収800万円となっている。年収800万円を下回ると、景気が『良くなりつつあると思う』は、20%を切り、年収800万円を超えるとそれが30~40%台に跳ね上がっている。



また、当然だと思うが、年収が低くなればなるほど景気が『悪くなりつつあると思う』が増えている。昨年来からの株高は、資産もある高収入層に寄与したことが全体の景気感に影響を与えていたようだ。

④「アベノミクス」評価は？

i) 「評価する」が「評価していない」を約10ポイント上回った！

良し悪しの絶対的評価は一桁で低く、『ある程度評価』と『あまり評価しない』がともに多くを占めるが、『ある程度評価する』(38.8%)と答えた人は、株高の恩恵を受けた人や企業業績上昇を認識できた人達と想像されるが、「あまり評価していない」(28.3%)人も調査対象の4分1を超えている。年金生活者や一部の主婦層や非正規社員などが答えたものとみられる。

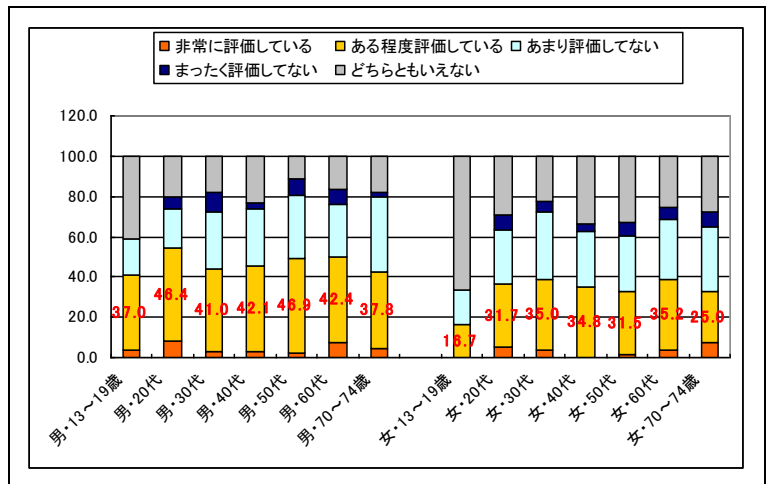
アベノミクスの評価は、全体としては『どちらとも言えない』が2

3.0%で、回答者の約5人に一人が評価に戸惑っているようだ。どう評価しているのかを年齢別・男女別・収入別で見よう。

評価	割合
非常に評価している	4.0
ある程度評価している	38.8
あまり評価してない	28.3
まったく評価してない+	6.0
どちらともいえない	23.0

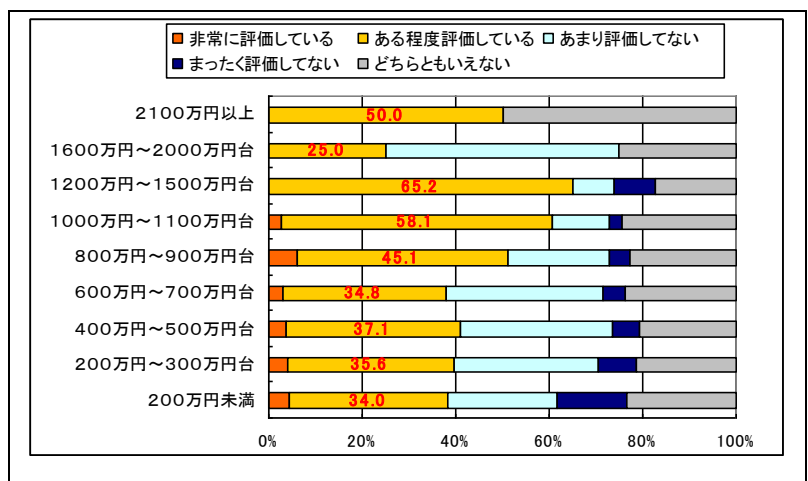
ii) 年齢別・男女別では男性中高年が高評価。女性の評価は戸惑い気味

アベノミクスの評価を年齢別・男女別で見ると、『評価する』と『ある程度評価する』を加えたポイントでは、男性では10代と70以上の高齢者は若干低くなるが、概ね40%ポイントとなっている。一方、女性はいずれの世代も40%を下回り、『どちらともいえない』が20%を超えている。女性にとってはアベノミクスはやや他人事のように受け止めている部分もありそうだ。



iii) 年収別では高収入層が高評価

アベノミクスの評価を年収別で見ると、年収1千万円以上1千6百万円未満の年収層の評価が他の年収層に比べて抜きん出ている。逆に、年収8百万円以下の年収層は、『非常に評価』に『ある程度評価』を加えても40%前後のスコアになっている。どの年収層も『どちらともいえない』が20%を超えている。これは、9月の調査時は、アベノミクスが動き始めた段階であり、1年経過していないことも影響しているのかもしれない。



以上

次回(1月発行)は『消費税』について意識調査結果を報告